

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 王 燕

本論文は、日本語の授受表現の多様性を中国語母語話者を対象とした日本語教育の観点から扱ったもので、第Ⅰ部序論、第Ⅱ部本論6章、第Ⅲ部からなっている。言語量は約42万字、400字詰め約1000枚に及ぶ。

本論は次の6章からなる。

- 第1章 授受動詞の特徴 — 中国語との比較を通じて —
- 第2章 授受動詞の文法化 — 授受動詞の基本的な意味機能 —
- 第3章 授受補助動詞の表現効果 — 授受補助動詞の派生的な意味機能 —
- 第4章 授受補助動詞の意味機能の再確認
— 「使役+授受」の複合形式を手がかりに —
- 第5章 授受補助動詞構文の外的連関について — テモラウ構文の場合 —
- 第6章 語用論の観点から見た授受表現 — 敬語との関わりを中心に —

第Ⅰ部序論では、研究の動機、研究対象、アンケート調査の概要、本論文の構成などについて述べられている。

第Ⅱ部が本論文の基幹部分に当たる。

第1章で著者は、本論文の研究対象が「やる・あげる・さしあげる」「くれる・くださる」「もらう・いただく」という3系列7つの授受動詞であることを示し、その本動詞としての用法を中国語の「授受の動詞」と対照しながら検討している。著者は、日本語の授受動詞には、待遇性の区別、恩恵性の有無、方向性の区別、方向性と絡み合った立場性の区別などの特徴が認められるとし、それらの観点から以下の補助動詞としての用法を検討しようとする。

第2章は、補助動詞としての授受動詞の基本的な意味機能の考察に当てられている。著者は、本動詞としての授受動詞は「物の恩恵的な移動」を、補助動詞としての授受動詞表現は「行為の恩恵的な移動」を表すとし、そのことによって授受表現には受益者指示機能が発生し、それが「に格」「を格」「から格」「と格」と重なったり、「のために」の形で現れたりする場合の条件を検討している。本章までは授受表現に関わる基本事項である。

第3章は、授受補助動詞の派生的な意味機能の考察に当てられている。派生的な意味機能とは、行為の授受から更に進んで、話者の感情、意志、評価などの主観的表現効果を色濃く持った授受補助動詞表現を言う。この種の細部に至る観察が、本論文の特色の一つである。著者は「てあげる」には、恩恵性を基点としながらも「なでてあげずにはいられなかった」のように行為の受け手への一方的な温情を表す用法があるとする。また「クリームをお顔全体につけてあげてください」「味をととのえてあげる」のような「優しさを表す」「出来事が良い方向へ進む」とも言いうる用法があるとする。また「きっと合格してやる」のような「強い意志の表明」という機能を持つ用法があるとする。ただし「強い

意志の表明」の「てやる」が真に授受表現に当たるか、審査委員から疑義が指摘されている。更に著者は「てくれる」には、恩恵性を基点としながらも「息子の病気がやっと治ってくれた」「雨が降ってくれた」のような「事象をプラス評価する」用法が認められるとする。一方「てもらう」には、明瞭な境界線が引けるわけではないが「依頼受益」と「単純受益」の二種が認められ、「単純利益」から更に進んで「ようやく雨に降ってもらい、」のような「プラス評価」用法も認められるとする。また更に著者は、授受補助動詞には揃って「ひどい目にあわせてやる」「困ったことをしてくれた」「無責任に言ってもらっては困る」のようなアイロニー的用法があることを指摘する。このように現在も授受補助動詞表現は、その使用制限が緩くなるにつれて、話者の主観的態度を示す機能が前面化する方向へ進んでいると著者は主張している。

第4章では、「させてやる」のような使役表現と授受表現との複合形式が扱われている。使役には「強制」「許可放任」「原因」等のバリエーションがあるが、著者はそれらの使役表現と授受補助動詞表現の複合体を扱うことによって、第2章、第3章で示された枠組みを改めて検討している。

第5章は、使役構文・受身構文とテモラウ構文の外的連関を取り扱っている。構文の外的連関とは、ある一つの構文形式の機能を他の構文形式とのパラダイグマティックな対立において捉える試みを言う。具体的には「太郎を行かせる」「太郎に行ってもらう」「太郎に行かれる」などの「使役」と「受益」、「受益」と「受身」の相補性が問題になり、それぞれの使用条件が考察されている。

第6章では、語用論、特に人間関係構築のためのストラテジーとしての敬語使用と授受動詞使用の差異を、「敬意」と「謝意」というキーワードによって考察している。敬語使用によって適切に「敬意」が表現されていても、十分な「謝意」が授受表現によって表現されていなければ不適切な言語使用となる例が、特に話し相手への気配りという点を中心に詳細に考察されている。「謝意」という視点からの日本語表現の考察は、今後の展開が更に期待される領域であろう。

第Ⅲ部は、「まとめ」と「今後の課題」である。

本論文の著者は極めて高度な日本語運用能力を持ち、授受表現の表現性の一々を的確に理解している。また非母国語話者であることがむしろ利点となって、気づきにくい表現性の微細な差異を日本人研究者以上に感知しそれを表現することができる。千を越える用例を伴う隅々に至るまでの総合的・詳細な記述が本論文の最大の強みであり、日本語教育への貢献も大いに期待されよう。一方、より理論的な構成力・展開力の強化、言語学的一般化への寄与などが、著者の今後の課題となろう。しかしながら、本論文の総合的かつ感受性に富んだ詳細な記述には目を見張るものがあって、今後の更なる発展が十分に期待される。

以上の諸点に鑑み、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。